

## ■「予約ありません」といわれる

私、妻、張さんの三人は2008年11月23日、北大武山から下山して、高雄(左営)を昼過ぎ発の新幹線に乗った。下車駅の台中へは50分くらいで着いてしまう。終点の台北まで乗車する張さんとお別れの挨拶や、荷物の確認などをして、やれ一段落。予定より早い列車に乗ったのでこれから訪ねる私の朋友、許さんに早く着いたと連絡しなければならない。張さんも心得ており、乗車してから許さんの番号を叩いて、何度か通話を試みたがうまく繋がらなかった。連絡が取れないまま、とうとう台中に着いてしまい、張さんとあっけなくお別れになった。高速で移動する台湾新幹線は携帯電話との相性が悪いようだ。

事前の取り決めでは、許さんが列車に合わせて台中駅へ迎えに来てくれるはずだった。しかし二時間も早く着いたので迎えを断り、台中駅からタクシーでホテルへ乗り付けることにした。山登中の三日間で汗まみれで、一刻も早くホテルのシャワーを浴びたかったのも一因である。

やたらと広くせに人影まばらな新幹線台中駅舎内を右往左往して公衆電話を見つけ、許さんに出迎えはいらなくなったと伝え、次にタクシー乗り場を探した。

タクシー乗り場は閑そうだった。案内係が乗客に紙切れを渡すので、何かと見れば白紙のタクシー領収証。これの使い道は乗客が好きな数字を書き込み、サラリーマンは会社に回し、自営業者は経費で落とす仕組みのようだ。

台湾新幹線の多くの駅にいえるが、ホテルのある台中市街と新幹線の駅はけっこう離れていて、ホテルまで20分ぐらいかかった。

台中のホテルは、ご当地の許さんに予約をお願いしてあった。台中の市街地にある高層ビルのホテルにタクシーを乗り付けるとさすが五つ星、ドアマンがすかさず飛んできて、荷物を運び入れる。荷物は汚いリックサックなどで、格好は私がサンダル、妻は山から下りたままの泥まみれ登山靴で、共に汗くさく五つ星にはそぐわなかった。

勇んでフロントにおとなうと、予約は入っていないという。えーっ、うそーっ！ 言葉の障害を超えてフロントのお姉さんが伝えたところによれば、それは隣のホテルだろう

という。訝しく思いながら荷物を自分で運び、外に出ると五つ星ホテルの脇に通用口といった感じの入り口があり、これが目的のホテルらしい。でも、別棟ではなく同じビルなのだが。

さて、通用門ふうのガラス戸を開けて中にはいると、なるほど五つ星より見かけが劣るがフロントがあった。係の小姐に問い合わせると、ここでも予約はないという。これは困った、困惑だ。けれども次の策を考える間もなく、小姐は向こう側のホテルだろうと後ろを示した。振り向くと同じホールのはず向かいの隅に、もう一つフロントがあった。また荷物を持ち、左側のフロントから右側のフロントへ移動した。カフカの小説並みに永遠に予約したホテルに着かない予感がしたが、今度のフロント嬢は和服姿の台湾小姐で日本語OK、「予約あります」。やっと今夜のホテルにたどり着いた。

整理してみると、もともとは「台中晶華酒店」という名前で営業していた大きなホテルが、経営者が変わって五つ星の「台中金典酒店」になった。同じビルにまだ空いている階があるので、別の廉価ホテル2軒が入った？かな。

道理で事前に聞いた料金が、五つ星なのにバカに安いと思ったが、許さんが私の懐を察して設備の割には格安の宿を見つけてくれたのだ。そんないきさつをメールで書いて送ってくれたが込み入った中国文は判らず、文脈を勝手に解釈して五つ星のホテルと思いこみ、恥ずかしい振る舞いをしてしまった。予約のホテルは「中港新館」といい、台湾・日本人ビジネス客などを客層としているようだ。

## ■許さんのこと

許さんとは日本で知り合った。彼は、新橋で台湾料理の店を美人の奥さんとやっていて、私が週一回くらいの割合で昼飯を食べに行った。ある時から塩加減が濃くなったので聞いたところ、お客さん方がもっと味濃くした方が日本人の口に合うといわれ、不本意ながら濃くしたという。私が注文するときは前のままの味がよいと言ったのが気に入られたのか、なにかとサービスしてもらった。日本のラーメンは味が濃くて台湾人には食べられないと何かで読んだので、本来台湾料理は薄味らしい。

数年して許さんは台中へ帰ったが、メールの往来は続いて、ぜひ台中へおいでなさいというのでこのたびの訪問となった。

部屋でシャワーを浴び、約束の午後5時にホテルのロビーで待っていると、許夫妻が黒いトヨタで迎えに来た。今晚案内してもらうのは、「逢甲夜市」といって台中最大の規模で、若者が多い夜市



宿泊した高層ホテル(正面)。かなり目立つので遠出の散歩も安心。公園で市民が太極拳



許さんの車に取り付けた、盗難よけ器具「鋼甲武士」。盗難犯への心理的効果が大きい。





若者が行き交う「逢甲夜市」。左上緑の丸い看板「新井茶」のすぐ下には「アライチャ」と片仮名があった。

だそうだ。夜市とは台湾の都会には付きものの屋台街である。今は秋だが夏の昼間は暑いせいか、暗くなってから営業するのが普通だ。

私と妻は後部席に乗り込み、許夫妻は前席に収まってたそがれとなった街を夜市へと向かった。

### ■逢甲夜市

「逢甲夜市」の名前のいわれは、近くに「逢甲大学」という私立総合大学があり、その名をとって「逢甲夜市」という。では大学の名前はというと日清戦争時代、広東省の教育者に「丘逢甲」という人物がいて、彼の名を冠して命名したのが「逢甲大学」という。この辺は当然孫引き。

許さんの車で夜市近くまで進めると、空いている路肩に駐車した。そこからそぞろ歩きになる。私はコンビニで缶ビールを仕入れる。そのわけは夜市には酒類が無く、ビールなど飲みたい人は事前に買って持ち歩くのだ。私以外は飲まないで、自分用に「台湾啤酒」を2缶買った。

広い道路に面して車のとぎれを待ち、通行人と一緒に強引に渡る。渡ったところから夜市の始まりで、人混みと店の多さに初めての日本人には何がなんだか分からない。許夫妻の説明を聞きながら、屋台の奥に分け入る。屋台といっても建物に付随しているものも多い。どれも、一品30～50元(大雑把に100～200円)程度で食べられる。

最初に食べた店は野菜、肉などのいわば台湾風おでんともいうべき煮物だった。4人でそれぞれ注文すると食材に応じて食べやすいようにカットして出してくれ、食べ歩きに適した紙容器に入れてくれた。

美味しくないと、値段の高い店は自然と客足が遠のいて長続きしないという。許夫人によれば台中の女性は夜市で食事を安く摂ったり、美味しい惣菜ものが買えるので自分で作らなくなり、料理が下手だという。ご主人の許氏も「うちのは料理が下手だ」と本音が冗談もらした。

人気の店は、行列ができて活気あふれている。臭豆腐の店が何軒もあり、そのうち並んで待つ店は特に美味しいのだろう。我々はメニューに臭豆腐もあるが、並んでいない店に入った。店の道路側は厨房とお持ち帰り品の売り場で、内部は狭い椅子テーブルで窮屈な食堂。さらに奥がありそこはレンタルビデオ屋さんになっていた。レンタルビデオ屋の客は食堂を通り抜けて出入りする。場所の有効利用ができるなら、業種の取り合わせなどかまわないの



「冰果室」のメニュー。赤い数字は値段、ココナツミルクや生の果物をふんだんに使う。



腸結めの中に腸結め「大腸包小腸包」。これは食べなかった。

だ。スープや麺などを頼み、別に臭豆腐を試食。大多数の日本人には臭くて食べられないというが、普段から臭い納豆など食べているせいか、美味しく味わう。ただし許さんによると臭くない方の臭豆腐だといった。

外に出ると狭い路地は行き交う若者の話し声や、呼び込みのかけ声で活気に満ちている。看板の漢字メニューは素人には難しい。例えば「大腸包小腸包」というものがあり、これはもち米のソーセージのなかにもう一つ小さい肉のソーセージを入れるという入れ子構造のソーセージだ。それと、魚の名前が漢字をみても分からなかった。

今度はデザート、「冰果室」という看板へ。日本流でいえばみつ豆屋といった店の前で漢字メニューの勉強。日本語塾の教師をしている許夫人から、メニューを示して果物や甘みを混ぜ合わせたデザートの説明をもらった。日本語教師とはいえ、台湾の果物の名前を日本人の知っている名前というのは難しそうだった。テーブルについてそれぞれお好みのフルーツデザートを味わった。

おなか一杯になって、台中の夜市の片鱗を舌と視覚で味わった。台中は台北、高雄に次いで台湾第3位の都市で、台北より好天の日が多く高雄より暑くなく、物価も安い暮らしやすい街だという。

台中滞在は1泊であったが許さんご一家からあたたかおもてなしを受けた。90歳を越す許さんのお父さんは日本語世代で、格調高い日本語を話された。おいとまぎわにふとお父さんの机に目をやると、使い込まれた「英和辞典」が置かれていたのが印象的であった。(おわり)